

バレーボールゲームにおけるセッターに関する研究

箕輪 憲吾*, 吉田 敏明**

A Study on the Setter in Volleyball Games

Kengo MINOWA*, Toshiaki YOSHIDA**

NK Junior College Volleyball Team had three setters on starting line-up for the games in 1993 Spring and Fall Kyushu League of Intercollegiate Women's Volleyball, and West Japan Division of Intercollegiate Women's Volleyball Tournament. The purpose of this study was to extract the requirements for being successful setter by comparing the performance of three setters and investigating to find in what situation the differences in setting abilities and setting tactics become clear.

Main findings were as follows:

- 1) It was clarified that one of requirements for being successful setter was to be able to jump-set at the place away from the normal setting position.
- 2) It was clarified that the difference of the ability of setting tactics would not be clear in the attacking phase from the serve-receive that the setter can make setting plan before hand. But would be clear in the attacking on transition, where the setter was required to keep up with changing situations.
- 3) It was clarified that the difference in setting abilities became evident when the setter ran the combination attack or did a third-tempo set from the place away from the normal setting position.
- 4) It was clarified that the difference of the result of setting would not be clear in the attacking phase from the serve-receive, but would be clear in the attacking on transition.

Key words : Volleyball , Setter , Game analysis

本研究は、NK短期大学女子バレーボールチームが1993年度の公式戦の大会別にスターティングメンバーとして起用した3名のセッターのゲームにおけるトスおよびトスワークについて比較を行うことにより、優れたセッターの条件を導き出すとともに、どのような状況においてセッターの能力の差が表れるかを明らかにすることを目的として行った。主な結果は以下の通りである。

- 1) セッターの定位置だけでなく、移動した場合にもジャンプトスを上げることができることが優れたセッターの条件の一つであることが明らかになった。
- 2) セッターのトスワークにその能力の差が表れるのは、事前に攻撃を計画できるサーブレシーブからの攻撃ではなく、状況への対応が要求されるラリー中の攻撃であることが明らかになった。
- 3) セッターのトスの結果にその能力の差が表れるのは、定位置でトスを上げる場合でなく、セッターが移動してコンビネーション攻撃を行う場合か2段トス攻撃を行う場合であることが明らかになった。
- 4) セッターのトスの結果にその能力の差が表れるのは、サーブレシーブからの攻撃ではなく、ラリー中の攻撃であることが明らかになった。

Key words : バレーボール, セッター, ゲーム分析

I. 緒 言

バレーボールゲームにおけるセッターはチームの要であり、勝敗の鍵を握っている¹⁾と言える。その理由として、レシーブトス・スパイクという一連の攻撃の組立を考えれば、トスを行うセッターがボールに接触する機会がプレイヤーの中で最も多いことが考えられる。さらに、自分達の持っている攻撃力を遺憾なく発揮することができるかどうかは、トスの善し悪しに関わっている¹⁵⁾ことから

ゲームにおけるセッターの重要性が認識できよう。これらに関連して吉田¹⁴⁾は、監督がどのような観点を重要視してチームづくりを行っているかについて因子分析による研究を行い、セッターという独立した因子が抽出されたと報告し、それはセッターがチームにとって重要な役割を果たしているためであろうと述べている。また黒田⁶⁾は、セッターはゲームの流れを左右する重要な役割を占め、その条件としては判断力・応用力に優れ、常に冷静、沈着な選手が望ましいと述べている。一方、ゲームにおけるトスについて福原³⁾はセットの勝敗との関連から研究を行い、勝ちセットの方が良いトスを上げる割合や早い攻撃の割合が高く、攻撃のためにより条件を整えていると報告している。さらに福原⁴⁾は、セットの勝敗にはトスの種類に差が

*県立長崎シーボルト大学
Siebold University of Nagasaki

**USA Volleyball

あり攻撃に変化を持たせた結果スパイク決定率も勝ちセットの方が高いと述べている。

以上のようにゲームにおけるセッターの重要性、あるいはセットの勝敗とトスの関連についてはこの他にも数多く報告^{7,10,13,16,17,19)}されている。しかし、これまでにゲームにおけるトスを行うセッター自体に関する研究は行われていないのが現状である。実際の指導現場において、ゲームにおいてはジャンプトスが有効である²⁾、という一般的な理論によってセッター指導を行うことは可能であるが、一般論のみによる指導が全ての選手に当てはまるとは考えにくい。吉田¹⁸⁾は、変則サーブプレシーブフォーメーションに関する事例的研究の結果、一般性の高い結論を導き出すには種々の観点からの分析を試みるとともに多くの事例の集積が必要であると述べている。このことは、バレーボールの他の場面にも関連して言えることであり、指導現場における事例研究の必要性を示唆するものと考えられる。

このような状況の中で、本研究ではバレーボールゲームにおけるセッターに関して研究を行うものである。セッターに関する研究を行う際の問題点は、多くのチームがワンセッターシステムを用いていることから、それぞれのチームの特徴、状況が異なるため他チームのセッターとの単純な比較が困難であることが上げられる。当然のことながら、各チームのアタッカーは身体的にも技能的にも等しいものではなく、それぞれのチームは全く別個の集団と考えなければならない。これらのことがこれまでにトスに関する研究は行われているが、セッターに関する研究が行われなかった原因の一つと考えられる。しかしながら、バレーボールにおける事例研究の必要性とセッターというポジションの重要性を考え合わせると、セッターのトスの善

し悪しや勝敗との関連だけでなくそれを行うセッター自体に関する研究が必要であると言えよう。そこで本研究では、平成6年度の公式戦で同一チームが大会別にスターティングメンバーとして起用した3名のセッターを対象としてそのトス及びトスワークについて比較を行い、セッターの特徴や評価との関連から考察を行うものである。

本研究の目的は、平成6年度の公式戦で同一チームが起用した3名のセッターを対象として、ゲームにおけるトス及びトスワークについて比較を行うことにより優れたセッターの条件を導き出し、今後のバレーボールにおけるチームづくりに関する資料を得ることである。

II. 研究方法

2.1. 研究対象

対象は、NK短期大学女子バレーボールチーム（以下：NKチーム）が平成6年度の公式戦で起用した3名のセッター（Y.N., T.Y., T.T.）の出場した大会の計43セットである。Y.N. は5月に行われた全九州大学女子春季1部リーグ戦（14セット）、T.Y. は7月に行われた西日本大学女子選手権（13セット）、T.T.は10月に行われた全九州大学女子秋季1部リーグ戦（16セット）にそれぞれスターティングメンバーとして出場している。3名のセッターに関する経歴、及び出場した大会の結果は表1に示したとおりである。なお、セッター以外のスターティングメンバーに関しては各大会とも全て同じメンバーであった。

2.2. 対象チームの状況とセッターの評価

NKチームの監督は平成6年度のチーム構想として、新入生の Y.N. をスターティングメンバーとして、T.Y. をそ

表1 セッターの経歴と戦績

	過去の経歴	大会の結果	評価
Y.N. (1年) 162cm	セッター歴・約3年9ヶ月	春季リーグ戦優勝	A
	高校1年時に国民体育大会出場、3年時に全国高校総体出場。また短大入学前に全日本ジュニア候補合宿参加。	7勝0敗 得セット 14 失セット 0 セット率 1.00	
T.Y. (2年) 168cm	セッター歴・約4年3ヶ月	西日本大学選手権3位	C
	高校2年時に全国高等学校バレーボール選抜優勝大会出場、3年時に全国高校総体出場。	3勝1敗 得セット 8 失セット 5 セット率 0.62	
T.T. (2年) 167cm	セッター歴・約4ヶ月	秋季リーグ戦2位	B
	高校3年時に全国高校総体にセンタープレーヤーとして出場。短大2年時の7月からセッターに転向した。	6勝1敗 得セット 12 失セット 4 セット率 0.75	

*セット率=得セット数/総セット数

の控えのセッターとして起用することを考えていた。T.T. に関しては、レフトプレイヤーのレギュラーか控えかという存在であり、セッターとして起用することは構想の中に全く存在しなかった。しかし、春季リーグ戦終了後スターティングメンバーであった Y.N. が事情によりチームを離れざるを得ない状況になり、セッターが T.Y. のみになったため、春季リーグ戦でレフトの控えであった T.T. を急遽セッターとしてコンバートした。T.T. はそれまでにセッターとしての経験は全くなく、その実力は未知数であり、その後の大会をレギュラーのセッターとして起用できるかどうか判断できる状態ではなかったが、T.Y. ではその年の目標とする成績を達成することは困難な状況であった。

以上のような状況の中で表1に示したように、それぞれの選手が出場した試合結果から算出したセット率（得セット数/総セット数）と NK チーム監督の専門的視点によりセッターの評価を行った。Y.N. は入学以前からその実力は全日本ジュニアチーム候補の合宿に参加するなど高い評価を得ており、出場した試合においても失セットゼロの成績でありAランクとした。T.Y. に関しては、短大1年生時にセッターの控え選手としてチームに貢献していたが、2年生時にレギュラーメンバーとして起用するというチーム構想はなく、出場した試合のセット率も3名の中で最も低い0.62の成績であったためCランクとした。T.T. に関しては、セッターとしての経験が少なくその実力の正確な判断は難しい面があったが、経験のある T.Y. 選手を退けてスターティングメンバーとして起用され、出場した試合のセット率も0.75とT.Y. 選手の成績を上回ったためBランクと評価した。

2.3. 方法

本研究は、以下に示す項目について3名のセッターのゲームにおけるトスに関して比較し、得られた結果とセッターの評価を関連させて考察を行う、という手順によって行うものとした。

- (1) ジャンプトス（以下：Jp.T）とスタンディングトス（以下：St.T）の内訳について
- (2) セッターのトスワークについて
- (3) トスの結果について

まずトスの内訳については、レシーブの返球状況別に Jp.T と St.T の本数を集計し全体に占める割合を算出、返球状況別に検定を行った。

本研究におけるレシーブの返球状況の分類は以下に示す通りである。

- AR：セッターがほぼ定位置でコンビネーション攻撃を行うことができる返球
 BR：セッターが定位置から移動するがコンビネーション攻撃を行うことが可能な返球
 CR：セッターがトスをあげるが明らかに2段トス攻撃し行うことができない返球

次に、セッターのトスワークについては、セッターのツース攻撃を除く全ての攻撃を先行研究^{8,9)}を参考に以下のように分類し、サーブレシーブ（以下：SR）からの攻撃とラリー中の攻撃別に各攻撃の頻度を集計、それぞれが全体の占める割合を算出し、検定を行った。

速攻：A・B・Cクイック・1人時間差攻撃

ブロード攻撃：センターからライト方向へ助走して片足踏切によるスパイク

時間差攻撃：速攻をおとりとして行うセッターの前・後とライトの速いトスを含む攻撃

オープン攻撃：ライト側の速いトスの攻撃は時間差攻撃と捉えたためレフト側のアンテナ付近からの攻撃とバックアタック

最後に、トスの結果に関しては以下に示す評価基準に従い、レシーブの返球状況別とコンビネーション攻撃の状況別（SRからの攻撃とラリー中の攻撃）にトスの結果を集計、それぞれが全体に占める割合を算出し、検定を行った。

AT：アタッカーが良い状態で攻撃できるトス

BT：アタッカーが良い状態ではないが強打攻撃は可能なトス

CT：攻撃が不可能で相手に返球するだけのトス及びトミス

なお、本研究における検定は全て χ^2 検定により行った。

III. 結果と考察

3.1. セッターのトスの内訳について

表2は、全体とレシーブ返球状況別におけるセッターのコンビネーション攻撃のトスの内訳を示したものである。

表2 状況別各セッターのトスの内訳

		Jp.T	St.T	TOTAL		
AR	Y.N.	トス数	102	31	133	*
		%	76.69	23.31	100	
	T.Y.	トス数	54	83	137	
		%	39.42	60.58	100	
	T.T.	トス数	99	43	142	
		%	69.72	30.28	100	
BR	Y.N.	トス数	131	72	203	
		%	64.53	35.47	100	
	T.Y.	トス数	28	169	197	
		%	14.21	85.79	100	
	T.T.	トス数	91	145	236	
		%	38.56	61.44	100	
TOTAL	Y.N.	トス数	233	103	336	
		%	69.35	30.65	100	
	T.Y.	トス数	82	252	334	
		%	24.55	75.45	100	
	T.T.	トス数	189	189	378	
		%	50.00	50.00	100	

* p < 0.05

検定の結果、全ての状況において有意な差が認められた。TOTALで見ると、Y.N.はJp.Tの割合が、T.Y.はSt.Tの割合がそれぞれ高く、T.T.についてはどちらも50%であった。状況別に見ると、ARの場合はY.N., T.T.のJp.Tの割合が高く、T.Y.はSt.Tの割合が高い、BRの場合はY.N.はARと同様にJp.Tの割合が高いが、T.T.はSt.Tの方が高く、T.Y.はARと同様にSt.Tの方が高いという結果であった。各セッターのARとBRのトスの内訳を比較してみると、Y.N.は12.16%、T.Y.は25.21%、T.T.は31.16%それぞれBRにおけるJp.Tの割合がARと比較して低いという結果であった。これらのこととセッターの評価(表1)を関連して考えると、評価の高い順にセッターの全体のトスに占めるJp.Tの割合が高いという結果であった。

浅井ら²⁾はJp.Tの有効性に関する研究の結果、セッターのJp.T動作は相手チームのブロック参加人数を少なくし、アタッカーに有利な攻撃条件を与えていると報告している。このことから考えると、味方の攻撃をより有利な状態で行わせるJp.Tを多く用いることができるセッターが優れたセッターと言える。評価が高いとされたY.N.は、本研究の結果定位置(AR)のみでなく移動した場合(BR)でもJp.Tを多用し、常にアタッカーに有利な攻撃条件を与えていることから、優れたセッターであることを示している。これらのことから「様々な状況でジャンプトスを行うことができる」ということが優れたセッターの条件の一つであると考えられる。また、移動してトスを上げる場合でもJp.Tを多用することができることは、レシーブされたボールに対する読みの能力とボールの落下点への移動スピード能力が高くなければできないと考えられ、これらの能力が優れたセッターに必要な条件であると推察される。これに対してT.Y.については全く逆で、移動した場合のJp.Tの割合が非常に低く、レシーブが正確に返球されなかった場合Jp.Tによりアタッカーにより条件を整えることが難しいという結果であり、それが優れたセッターとの能力の差となっていると言える。セッターとしての能力の正確な判断が困難であったT.T.については、ARの場合はJp.Tを多用し、BRの場合はSt.Tを多用していた。これは、T.T.のセッターとしての経験年数が少ないための結果と考えることもできるが、経験の少なさをカバーするため定位置の場合はJp.Tを多用するが、移動した場合は無理をせずSt.Tにより丁寧にトスを行うというセッターとしての冷静な判断力を持っている可能性があるかと推察される。渡辺ら¹²⁾は、よいセッターの精神的な条件のひとつとして、ものごとを冷静に判断できることをあげている。このことから、T.T.は精神的には優れたセッターの資質を持っていると推察される。

3.2. セッターのトスワークについて

表3は、全体と状況別の各セッターのトスワークに関する結果を示したものである。検定の結果、ラリー中の攻撃のトスワークに関してのみ有意な差が認められた。SRか

らの攻撃に関しては、3名のセッター共に各攻撃の全体に占める割合は、速攻>時間差攻撃>オープン攻撃>ブロード攻撃の順であった。ラリー中の攻撃のトスの割合に関してはY.N., T.T.は同様の傾向を示し多い順に、オープン攻撃>速攻>時間差攻撃>ブロード攻撃であったがT.Y.は、オープン攻撃>時間差攻撃>速攻>ブロード攻撃の順であった。また、各セッターのトスワークをSRからの攻撃とラリー中の攻撃を比較した場合、Y.N.は11.34%、T.Y.は26.25%、T.T.は16.17%と全てのセッターにおいてオープン攻撃の割合が増加しており、他の攻撃の割合が減少していた。

SRからの攻撃は事前に計画することができる¹⁾ことから、そのトスワークがチームとしての基本的な攻撃の組立であり、セッターはラリー中の攻撃においてもその組立に近いトスワークを行うことが必要であると考えられる。このこととセッターの評価を関連して考えると、評価の高いY.N.はラリー中のオープン攻撃の増加率が最も低く、SRからの攻撃に近い形のトスワークを行っていたが、評価の低いT.Y.はオープン攻撃の増加率が最も高く、さらに全体に占めるその割合が50%を越えていた。Selinger¹⁾は、ラリー中の攻撃は状況への対応が要求され、計画的に行うのが困難であると述べている。これらのことから、Y.N.のトスワークはセッターとして状況への対応力に優れていると言え、T.Y.のトスワークと考え合わせるとSRからの攻撃とラリー中の攻撃のトスワークを比較した場合にセッターの能力の差が表れるという結果が得られた。

福原⁴⁾は、攻撃を十分整えられない状態からのトスでも勝ち試合の方はオープントス以外の割合が高く攻撃に変化を持たせている、としてトスの結果そのものではなくトスの種類に差があると報告している。これは、ラリー中あるいはセッターが移動した場合でもオープントスを上げるだけでなく様々な攻撃を組み立てるトスを上げることが勝つ

表3 各セッターのトスワークの結果

		速攻	ブロード*	時間	OPEN	TOTAL
SR	Y.N. トス数	59	18	53	43	173
	%	34.10	10.40	30.64	24.86	100
	T.Y. トス数	77	16	55	48	196
	%	39.29	8.16	28.06	24.49	100
	T.T. トス数	72	20	54	41	187
	%	38.50	10.70	28.88	21.93	100
リ-	Y.N. トス数	54	7	43	59	163
	%	33.13	4.29	26.38	36.20	100
	T.Y. トス数	24	7	33	67	131
	%	18.32	5.34	25.19	51.15	100
	T.T. トス数	64	11	42	72	189
	%	33.86	5.82	22.22	38.10	100
TOTAL	Y.N. トス数	113	25	96	102	336
	%	33.63	7.44	28.57	30.36	100
	T.Y. トス数	101	23	88	115	327
	%	30.89	7.03	26.91	35.17	100
	T.T. トス数	136	31	96	113	376
	%	36.17	8.24	25.53	30.05	100

* p<0.05

ために必要であるということを示していると考えられる。このことに関連すると Y.N. はラリー中の攻撃においてもオープン攻撃だけに頼ることのない、勝つために必要なトスワークを行っており、これに対して T.Y. はラリー中の攻撃におけるオープントスの割合が非常に高く、それが優れたセッターとの能力の差となって表れていると考えられる。一方、T.T. のトスワークの結果は、T.Y. よりも Y.N. に近いものであったが、これに関しては T.T. のセッターとしての経験年数の少なさを考えると、優れたセッターの資質を持っていると推測される。前述の渡辺ら¹²⁾ は良いセッターになる条件として、試合経験を積んで状況判断の能力を身につけることを上げている。本研究の結果はこのことを支持するものであり、T.T. は優れたセッターとしての資質を持っていると同時に、セッターにおける試合経験の必要性と重要性が認識された。

吉田¹⁷⁾ は、ラリー中におけるレシーブからトスのカバーリングが良いことがセットを得ることに関連していると述べている。本研究の結果はこのことに関連してラリー中の攻撃のトスの重要性を支持するものであった。さらに箕輪¹⁰⁾ は、ルール改正に伴うSRからの攻撃に関する研究を行い、セッターのトスワークが勝敗に関連していると述べている。このことと、成原ら¹¹⁾ の「トスワーク」を十分発揮させる局面はサーブレシーブ局面であるという報告から、ゲーム中のSRからの攻撃におけるトスの重要性が認識できる。しかし、本研究の結果ラリー中の攻撃のトスワークのみ有意な差が認められたことから、セッターの能

力に明らかな差が表れるのは、トスワークを発揮しやすい¹¹⁾ と言われるSRからの攻撃の場面ではなく、ラリー中の攻撃局面であることが明らかになった。さらに現在は全セットラリーポイント制のルールに移行されているが、本研究の結果は、ハイレベルのバレーボールではほとんどの得点がラリー中の攻撃で記録され、相手のミスやブロックによるものではなく、チームのラリー中の攻撃の重要性に関する認識に誤りがあり、SRからの攻撃と同様にラリー中の攻撃にも力を入れるべきである¹⁾ というサイドアウト制に関する指摘を支持するものであった。

3.3. セッターのトスの結果

表4は、全体とレシーブの返球状況別のセッターのトスの結果を示したものである。検定の結果、全体とBR・CRの状況のトスの結果について有意な差が認められた。TOTAL に関して見ると Y.N., T.T. はATの割合が高く、T.Y. はCTの割合が高かった。それぞれの状況に関して見ると、ARについては Y.N. のCTの割合が最も高く、T.T. のATの割合が高いが各セッターの間に大きな違いは見られない。これに対して有意差が認められたBR・CR (2段トス) に関しては Y.N. と T.T. の結果に大きな違いは見られないが、T.Y. のCTの割合がともに非常に高く、さらに T.Y. の2段トスにおける ATの割合が非常に低いという結果であった。それぞれのセッターのトスの結果を状況別に比較した場合、3名のセッター共にAR-BR-CRの順でATの割合が減少しBTの割合が増加していた。そして、Y.N. と T.T. はARと比較して BRの場合のCTの割合が減少していたが、T.Y. は AR-BR-CR とレシーブの返球結果によってトスを上げる際のセッターの移動が大きくなるに従ってCTの割合が増加していた。

本研究の結果、セッターの評価に関連して全体のトスの結果 (TOTAL) に差があり、検定の結果有意差も認められたことから、セッターの能力の差がゲームにおけるトスの結果に表れることが明らかになった。また、セッターとしての評価の高いY.N.と評価の低いT.Y.のトスの結果を比較した場合、トスを上げる際の移動が大きくなるに連れてその違いが大きくなる傾向が見られた。このこととBRと

表4 状況別各セッターのトスの結果

		AT	BT	CT	TOTAL
AR	Y.N. トス数	115	12	6	133
	%	86.47	9.02	4.51	100
	T.Y. トス数	116	16	5	137
	%	84.67	11.68	3.65	100
	T.T. トス数	127	12	3	142
	%	89.44	8.45	2.11	100
BR	Y.N. トス数	164	37	2	203
	%	80.79	18.23	0.99	100
	T.Y. トス数	156	28	13	197
	%	79.19	14.21	6.60	100
	T.T. トス数	195	37	4	236
	%	82.63	15.68	1.69	100
CR	Y.N. トス数	75	29	6	110
	%	68.18	26.36	5.45	100
	T.Y. トス数	65	40	16	121
	%	53.72	33.06	13.22	100
	T.T. トス数	86	38	5	129
	%	66.67	29.46	3.88	100
TOTAL	Y.N. トス数	354	78	14	446
	%	79.37	17.49	3.14	100
	T.Y. トス数	337	84	34	455
	%	74.07	18.46	7.47	100
	T.T. トス数	408	87	12	507
	%	80.47	17.16	2.37	100

* p<0.05

表5 状況別各セッターのトスの結果

		AT	BT	CT	TOTAL
SR	Y.N. トス数	143	26	4	173
	%	82.66	15.03	2.31	100
	T.Y. トス数	165	28	6	199
	%	82.91	14.07	3.02	100
	T.T. トス数	159	27	2	188
	%	84.57	14.36	1.06	100
ラリー	Y.N. トス数	136	23	4	163
	%	83.44	14.11	2.45	100
	T.Y. トス数	107	16	12	135
	%	79.26	11.85	8.89	100
	T.T. トス数	163	22	5	190
	%	85.79	11.58	2.63	100

* p<0.05

CRのトスの結果に有意な差が認められたことを考え合わせると、セッターのトスの結果にその能力の差が表れるのは、移動してトスを行う場合であると考えられる。従って、「移動した場合にミスを少なく安定したトスを上げることができる」ということが優れたセッターの条件の一つであると推察される。そして、ARについてのみトスの結果に有意な差が認められなかったということは、セッターの定位置にレシーブが返球された場合に限りセッターの能力差がなくなることを示していると考えられる。渡辺ら¹²⁾は、良いセッターになる条件のひとつとして、難しいボールを数多く練習してしっかりトスの技術を身につけることをあげている。本研究の結果は、このことを支持するものであった。またこれは逆に、チームとしてセッターの能力がやや劣ると判断される場合、それをカバーするだけのレシーブ能力が必要になると推測された。T.T. についてはAR・BRにおけるATの占める割合が3人のセッターの中で最も高く、これまでの結果同様セッターとして高い能力を有していると考えられ、経験を重ねることによってY.N.に劣らない優れたセッターとしての可能性を持っていると推察された。

表5は、攻撃状況別のトスの結果を示したものである。検定の結果、ラリー中の攻撃の結果についてのみ有意な差が認められた。有意差の認められたラリー中の攻撃においては各セッターのトスの結果に違いが見られ、Y.N., T.T. はATの割合が高く、T.Y. はCTの割合が高かったが、SRからの攻撃におけるトスの結果については大きな違いは見られなかった。各セッターに関して見ると、Y.N. はSRからの攻撃と比較してラリー中の攻撃のATが0.78%, CTが0.14%それぞれ割合が高くなっているが、全体として大きな違いは見られなかった。T.Y. はSRからの攻撃と比較してラリー中の攻撃のATの割合が3.65%低く、CTの割合が5.87%高く、T.T. はSRからの攻撃と比較してラリー中の攻撃におけるATとCTの割合がそれぞれ1.22%, 1.57%高くなっていた。

セッターとしての評価の高いY.N. はSRからの攻撃とラリー中の攻撃のトスの結果に大きな差はなく安定したトスを上げており、前述同様に様々な状況に対応した中で如何に安定したトスを上げることができることが優れたセッターの条件の一つであると考えられる。また、T.Y. はSRからの攻撃のトスの結果はY.N. と比較しても大きな差は見られないが、ラリー中の攻撃のトスの結果に差が認められた。このことと、ラリー中の攻撃のトスの結果に有意な差が認められたことから、セッターのトスの結果に差が表れるのはラリー中の攻撃局面であることが明らかになった。逆にSRからの攻撃についてのみトスの結果に有意な差が認められなかったということは、あらかじめ攻撃が計画しやすい状況においてはセッターの能力差がトスの結果に表れにくいことを示していると考えられる。T.T. については全ての状況においてATの割合が最も高く、全体に占

めるATの割合が高い方がよいセッターであると単純に考えられることから、トスの内訳およびトスワークの結果とを考え合わせると、T.T. はやはりセッターとして優れた資質を持っていると言えよう。

本研究のトスの結果から、セッターのトス能力の差が表れるのはラリー中の攻撃、およびセッターが移動してトスを上げる(BR・CR)状況であり、その能力を高めることがチームの攻撃力を最大限に発揮する上で非常に重要であると推測された。

IV. ま と め

NK短期大学女子バレーボールチームが平成6年度の公式戦でスターティングメンバーとして起用した3名のセッターのゲームにおけるトス、トスワークについて比較を行ったところ、以下のような結果が得られた。

1) セッターの定位置だけでなく、移動した場合にもジャンプトスを上げることができることが優れたセッターの条件の一つであることが明らかになった。

2) セッターのトスワークにその能力の差が表れるのは、事前に攻撃を計画できるサーブレシーブからの攻撃ではなく、状況への対応が要求されるラリー中の攻撃であることが明らかになった。

3) セッターのトスの結果にその能力の差が表れるのは、定位置でトスを上げる場合ではなく、セッターが移動してコンビネーション攻撃を行う場合か2段トス攻撃を行う場合であることが明らかになった。

4) セッターのトスの結果にその能力の差が表れるのは、サーブレシーブからの攻撃ではなく、ラリー中の攻撃であることが明らかになった。

本研究は、特定のレベルのチームを対象に行われたものであるが、得られた結果からセッターの能力差が表れる状況が明らかにされ、指導者が優れたセッターの育成を行う上での重要な示唆を与えるものと考えられる。本研究の結果を元に能力差が表れる場面を想定した練習をより多く取り入れることが、今後の優れたセッターの育成に繋がると考えられる。最後に、セッターはチームにおいて最も重要なポジションであるということから、セッターに関する他のレベルあるいは男子についてなど、より多角的な視点からの研究を継続して行うことの必要性が考えられた。

引用・参考文献

- 1) Arie Selinger・Joan Ackermann-Blount: ARIE SERINGER'S POWER VOLLEYBALL, ST. MARTIN'S PRESS, p.66・151・196, 1986.
- 2) 浅井正仁, 柏森康雄, 山本隆久: バレーボールのゲーム分析—ジャンプトスの有効性について—, 日本体育学会第38回大会号, 296, 1987.
- 3) 福原祐三: バレーボールのゲームにおけるトスについて, 日本体育学会第25回大会号, 347, 1974.

- 4) 福原祐三：バレーボールのゲーム分析，日本体育学会第26回大会号，521，1975.
- 5) 稲葉正文：稲葉バレーの心，日本文芸社，p.29，1983.
- 6) 黒田裕：ザ・バレーボール，日本文芸社，p.59，1993.
- 7) 箕輪憲吾・吉田敏明：バレーボールゲームにおける選手交代に関する研究，長崎県立女子短期大学研究紀要，39，81-87，1991.
- 8) 箕輪憲吾・吉田敏明：バレーボールにおけるサーブレシーブからの攻撃に関する研究－5人シフトと4人シフトの比較－，スポーツ方法学研究，8-1，101-108，1995.
- 9) 箕輪憲吾：バレーボールにおけるスライドスパイクに関する基礎的研究，長崎県立女子短期大学研究紀要，43，63-71，1995.
- 10) 箕輪憲吾：バレーボールゲームにおけるルール改正に伴うサーブレシーブからの攻撃に関する研究，長崎県立女子短期大学研究紀要，44，9-1，1996.
- 11) 成原俊夫・福原祐三・都沢凡夫・米沢利広：バレーボールの守備局面に関する一考察－「トスワークに関連して」－，日本体育学会第36回大会号，630，1985.
- 12) 渡辺泰行・小泉勲，日本バレーボール協会指導普及委員会（編）：実践バレーボール（上），大修館書店，pp.19-21，1981.
- 13) 渡辺泰行，日本バレーボール協会（編）：バレーボール指導教本，第3版，大修館書店，p.39，1988.
- 14) 吉田敏明：バレーボールにおける指導観点構造の性差，レベル差：東京学芸大学紀要 第5部門 芸術・体育，37，239-248，1985.
- 15) 吉田敏明：バレーボールマインド，道和書院，p.97，1988.
- 16) 吉田敏明・箕輪憲吾：バレーボールの攻撃組立能力に関する研究，東京体育学研究，15，55-60，1988.
- 17) 吉田敏明：バレーボールゲームにおけるカバーリングに関する研究，東京学芸大学紀要第5部門，40，171-278，1988.
- 18) 吉田敏明，箕輪憲吾：バレーボールにおける変則サーブレシーブフォーメーションに関する研究－アメリカ大学女子チームを対象にして－，スポーツ方法学研究，7-1，143-153，1994.
- 19) 吉田敏明・勝本真・中西康巳，小鹿野友平・高橋和之（監修）：バレーボールの技術と指導，不昧堂出版，p.59，1996.